

とを比較し、次に其の翻譯について考がへ譯者の該博なる智識に敬服し蒙を啓くこと少くなかつたが、中にはまた多少意見を異にする處もある、今順に従がつて之を列擧して敢て教を乞はふと思ふ。

一、第二行の第二語は *ozā* と寫して「ソノモノガ」と譯してあるがしかし「肉髻相ソノモノガ神妙ニセラレ莊嚴セラレテ頂ニアル」と云ふ意味なれば、次にのべる通りに頂といふ言葉も主格であるから一文に二個の主格をとることになる、また *oz* を「ソノモノ」即ち *self* の意に解くならば、なる語は如何に解くべきか、余はこれは *izā* 即ち *on* に相當する *postposition* だと思ふ、そうして此の場合には屢々認むるが如く *on* の意が *instru-mental* に轉じて「以て」の意即ち *with; by* 等の意味となつたものである、それで「肉髻相を以て飾られたる」の意だと考がへる、尙ほ

二、第三行の第二語 *topusi* を「頂ニ」と譯してあるが自分には其の理由が解らない、思ふに上の *ozā* を「ソノモノガ」と第一格に解いてしまつたので勢ひ此の語を三格にして「頂ニ」と見たのであろうけれども此の語を三格に見るべき理由はあるまい、即ち *topusi* は「彼の頭が」にて前句に續きて「肉髻相を以て飾られた彼の頭がある」の意と見るべきであらう、肉髻相が飾られて頂にあるのではない。

三、第九行目の末字を *o* と寫してあるが之は恐らく誤りであらう、一行の終りに空處があつて然も一語を容れるに足らない場合には其の前の語の末尾の文字を此の空處に書いて置くのはかゝる寫本に於ける常習である、もとより此の場合にその一字に意味のないのは當前のことで、たゞ字くばりの上に於ける一法であらう。

四、第十二行の第四語 *tagraginta* を只だ「侍者」と解し次の五百菩薩及び一切諸天に對する語と見られたる如き